

23. 箕・たろみ・ふるい

脱穀した稲にはわらくずも混じっている。それらをより分けるのにミ（箕）を使った。また篩をかねた目の荒いたろミ（垂箕）や四角粋のダイダロミも使った。

◆箕と風選

〈A〉はミ（箕）で口幅 38cm、奥行 53cm、高さ 19cm、脱穀したもみ（粃）と藁くず、ごみを振り分ける。〈B〉は『絵本通宝志』の江戸時代の箕の使用風景。両手で箕を抱えてバッサバッサと軽く放り上げるようにすると、軽い藁くずは風に飛ばされて粃だけが残る。粃に限らず麦や豆など広く風選作業に使われた。このように箕でより分ける動作を古くは「箕でヒル（簸る）」と言った。摂津市域ではどう呼んだのだろうか。

◆たろミ（垂箕）

〈C〉はたろミ（垂箕）で口幅 67cm、奥行 62cm。目の荒い大型の箕では粃は目から落ち、残った藁に付いた粃はカラサで叩いた（小谷方明『大阪の民具・民俗志』）。明治 10 年代の「摂津国各郡農具略図」には島上郡と島下郡に垂箕（タルミ）が出ている。

◆箕とは古い付き合い

奈良県の唐古遺跡から弥生時代前期初頭の箕が完形で出土した。口幅 60cm 余り、奥行 47cm で形は今日の箕と変わらない。稲作のはじめから 2200 年来使ってきた幼馴染の道具である。ミ（箕）という言葉も『日本書紀』や『播磨国風土記』から見える。また伝統行事や儀礼の中では、箕は靈魂を呼び戻したりする場面で使われることが注目されている。

◆日本の箕は中国系

〈D〉は中国河南省の隋代 595 年の墓から出土した陶製人形で、日本の箕と同じ形をしている。他方、韓国の民具の箕は両脇に翼のような出っ張りのある特異な形をしていて、日本の箕は中国系のようなだ。

◆フルイ（篩）、ダイダロミ

〈E〉は幅 59cm、長さ 104cm、高さ 104cm。板で囲った粗目の篩で、庭に 3 本の丸太を組み縄で吊るして把手を持って揺すった。「大極上別製別府箴安請合」と墨書があって大正 15 年（1926）製。鳥飼中ではダイダロミ、鳥飼下でツリトオシ、別府ではガサガサ。

◆ユリイタ（淘板）

〈F〉は「摂津国各郡農具略図」に出ている淘板（ユリイタ）で口幅 1 尺 8 寸、54cm。上から吊るして粃を入れて揺すると、比重の大きさの違いで重い粒が上部に集まるといふもの。大阪近辺で広く使われたようだが、摂津市にはまだ収集されていない。

